

〔伊呂波字類抄太倫〕婦タヤメ

〔書言字考節用集四倫〕婦タヤメ、婦タヤメ、婦タヤメ、婦タヤメ  
婦人順和 手弱女万 幼婦同

〔日本釋名中品〕婦人タヤメ 古事記に、手弱女とかけり、いふ意は、婦人は手の力よはしたは手也をやはやは也、よはとをやと通ず、

〔東雅人倫〕人ヒト 略 中 女をば猶ヲトメとも云ひ、又タヨワともいひ、又轉じてタヤメなど、  
もいふ、舊事紀、古事記、日本紀等にも、手弱女とするし、亦是婦人等の字を用ひ、萬葉集には、姝女幼婦等の字を用ひ、

〔古事記傳八〕手弱女、万葉十五丁、多和也、女とあり、此に依て訓べし、和也は弱と通ふ、中男を丈夫と云に對て、女は手弱意の稱なり、和名抄には、手弱女人、太乎夜米とあり、書紀、万葉などにも、如此訓を付たれど、こは稍後に訛れるなるべし、万葉六丁に、弱女、又十三丁に、手弱女、これらの訓ぞよき、

〔日本書紀垂仁〕八十七年二月辛卯、五十瓊敷命謂妹大中姫曰、我老也、不能掌神寶、自今以後、必汝主焉、大中姫命辭曰、吾手弱女人也、何能登天神庫耶、

〔萬葉集十五〕中臣朝臣宅守與狹野茅上娘子贈答歌略  
安波牟日能、可多美爾世與等、多和也、米能於毛、比美多禮氏、奴敵流許呂母會、

右九首娘子

〔倭名類聚抄二女〕姫 文字集略云、姫音基、音基原作基反、據一本改、和名比米、衆妾之稱、

〔箋注倭名類聚抄一〕按比女對比古之名、比靈異之義、比古猶言靈異兒、比女猶言靈異女、則知比古比女並是美稱、故日本紀用彥媛字、蓋依爾雅美女為媛、美男為彥也、按說文、姫黃帝居姫水以爲姓、是姫字本義、轉注爲婦人之美號、顏師古漢書注、姫者本周之姓、貴於衆國之女、所以婦人美號、皆稱姫焉、即六書所謂轉注也、故姫亦訓比女、其爲衆妾之稱、再轉用者、非此義、源君引之、訓比女、非是、